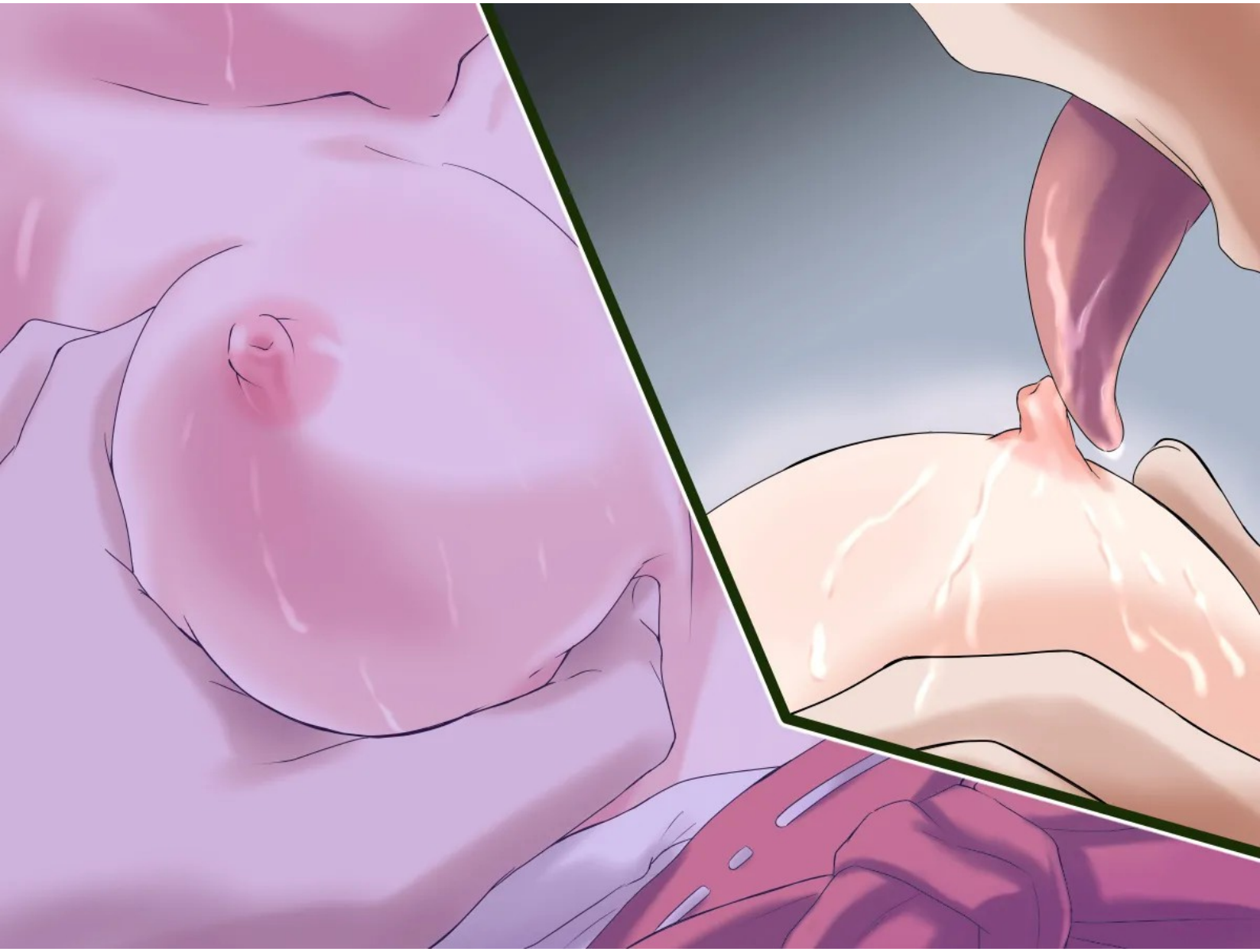
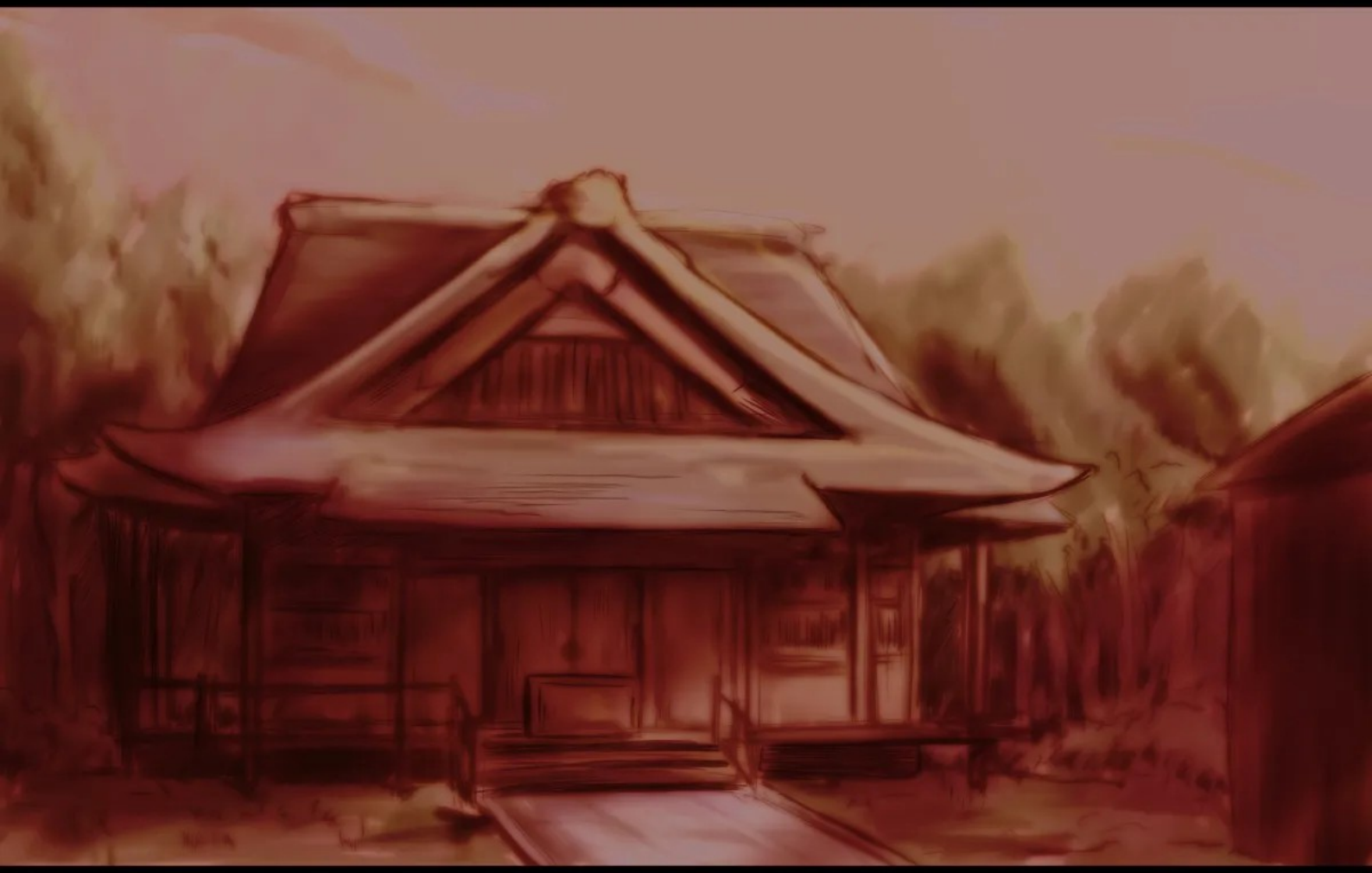
ある巫女少女の喪失録

女性視点回顧録風
巫女少女レイプCG集

○本編42ページ
サイズ：900×1200
（基本CG12枚＋α）





ある巫女少女の
喪失録

――私にとって大きな出来事になったあの日。
それでも記憶が所々おぼろげで、
間違ってたり矛盾してたりするかもしれません。

私は学校が終わってから家の手伝いをしてました。
私の家は古い神社で、掃き掃除なんかをすることが度々あり、
その日もそうだったと思います。

多少面倒という思いはありましたが
そこまで嫌じゃなかったと思います。
傾きかけた日差しが古い神社を照らしていました。

年始なんかを除けばせいぜい朝の散歩コースに
される程度の小さな神社です。
あちこちガタが来ていて、よくお父さんが
ボヤいていました。

そんなのでも私服や制服で掃除すると
小言を言われるので、
近くにある家で着替えてから、
巫女装束で掃除をしていたはずです。

そろそろ帰ろうかと思っていた頃、鳥居の方から
フラフラと人影が現れました。
その向こうはちょっと長い石段があって、
慣れてない人はちょっと疲れるかもしれません。

普段人が来ないのもあってその様子が気になって、
少し悩んでから話しかけました。
後のことを思えばやめておくべきだったんですけど、
その時はお客様だと思っていたので。
精いっぱいの営業スマイルで、大丈夫ですか、とか
そんなことを言ったと思います。

その人は普通の男の人に見えました。
よくいるサラリーマンって感じで、おじさんと呼ぶか
ちょっと迷うくらいの、でもお父さんよりは若い感じでした。

その顔は多分、ずっと忘れられないと思います。

ちょっと緊張するなあ
細かいことは覚えていませんが、話した感じも
特に変な所はなかったと思います。
あと、疲れていたようなので。ペットボトルの飲み物をあげました。
まさか手水所の水を飲めとは言えないですし、自分用だったので
飲みかけでちょっと恥ずかしかったですけど。
年が離れてるから、相手も気にしないかな、と。
そうしている内に日が傾いてきたので、
私は彼に会釈をして帰ることにしました。
箒なんかの片付けもありますし、着替えもしたかったので。
でもその時、後ろから声を掛けられて……。

振り向いたとき、あまりに顔が近くて焦点が合いませんでした。

最初に感じたのはミルクティーの匂いと、ほのかな甘み。

唇に何かが触れていることに気づいたのは、そのあとです。

キスされたと分かるまで時間が掛かりました。

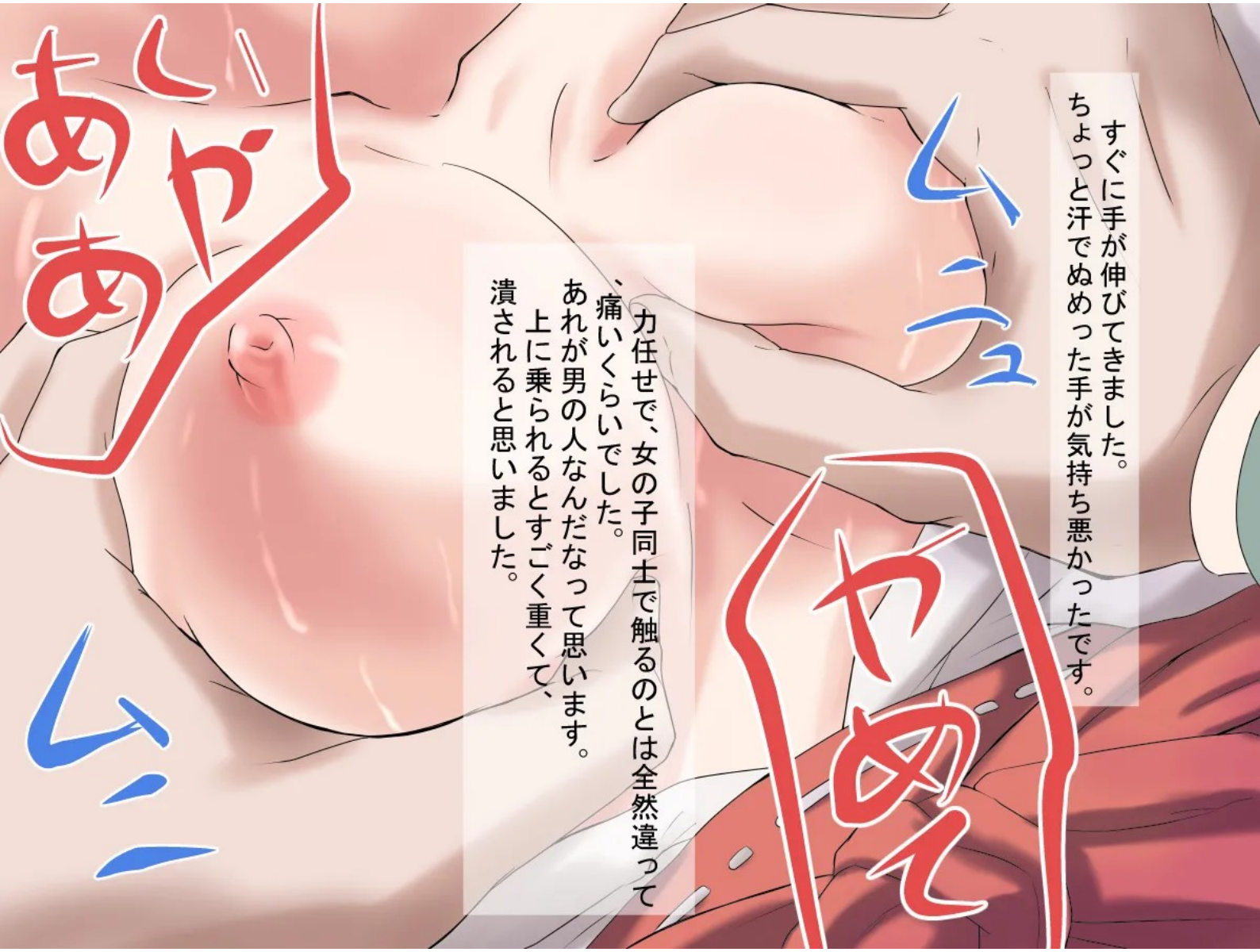
しかも舌が入ってきたんです。
どうすればいいか分からないうちに
どんどん事態が進んでいて。
初めての経験でしたし、いつの間にか
胸まで触られていて、頭が真っ白でした。

な…
えっ
なんで
気が付いて慌てて振り払いました。
尻もちをついて見上げる男の人が大きく見えました。
夕日でその人の表情ははっきり見えなくて、
でも目も放せなくて……。
心臓がバクバクいって身体が固まった感じでした。

た、
助けを呼ぼうとして、
口から出たのは小さな声だけでした。
たすけて…

逃げる暇もなく、私は押し倒されてました。
あんな自宅の近くで襲われるなんて、考えたこともなかったですし。
プルン
いっ、いやっ
だっ、
みないで
グイッ
胸元が広げられて、あまり大きくもない私の胸がさらけ出されました。
男の人に見られたと思って顔が熱くなりました。

いやぁぁぁ
助けて！
もっと叫ばないと
誰も来てくれないよ？
いや
誰かぁっ
ようやく大きな声が出てきて、
でもとても家までは届きません。
もとから人気のない神社ですし、
都合よく助けてくれる人なんて……。


すぐに手が伸びてきました。
ちょっと汗でぬめった手が気持ち悪かったです。
力任せで、女の子同士で触るのとは全然違って、痛いくらいでした。
あれが男の人なんだなって思います。
上に乗られるとすごく重くて、潰されると思いました。
ムニュ
ヤめて
いヤあ
ムニ

触られるだけじゃなく、舐められもしました。
温かくぬめった舌が肌をなぞる度、体が震えました。
どうしてこんなことになっているのか分からず、
抵抗する力も徐々に失われてきました。

そんなだったからかもですけど、
彼がベルトをいじり始めました。
眼前に突き出されたそれは大きく、
浮き出た血管がグロテスクに見えました。
その意図は、すぐに彼の行動で理解できました。
ガクガク
あっ
グイ

奥までちゃんと咥えろ！
歯がガタガタ鳴ってたので、強引に入ってきたそれを噛まないように必死でした。機嫌を損ねたら殺されるんだと。
ぐすぐす
むぐ
口の中が生臭さでいっぱいになって溢唾をどうすればいいのか分かりません。彼は私の頭を掴むと腰を振り始めました。

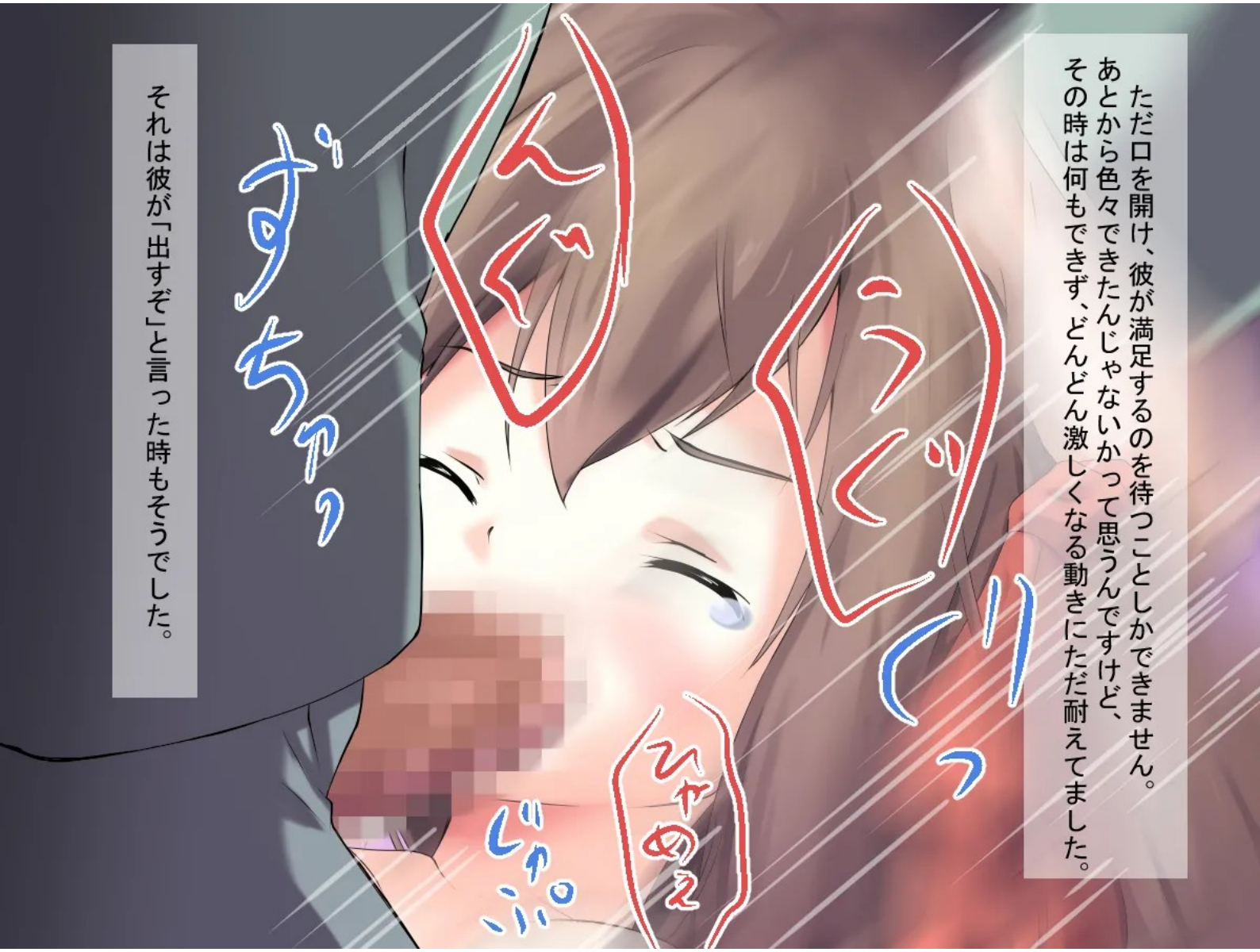
彼は私の口を犯しながら、何かを呟いてました。
後から分かったことを交えていうと、
それは会社への不満のようでした。

残業の多さや上司の愚痴とか。
彼は普段の生活に急に嫌気がさし、
全てから逃げるつもりで財布やスマホを置いて逃げ出したそうです。
死ぬつもりであちこちさ迷い、辿り着いたのがうちの神社でした。

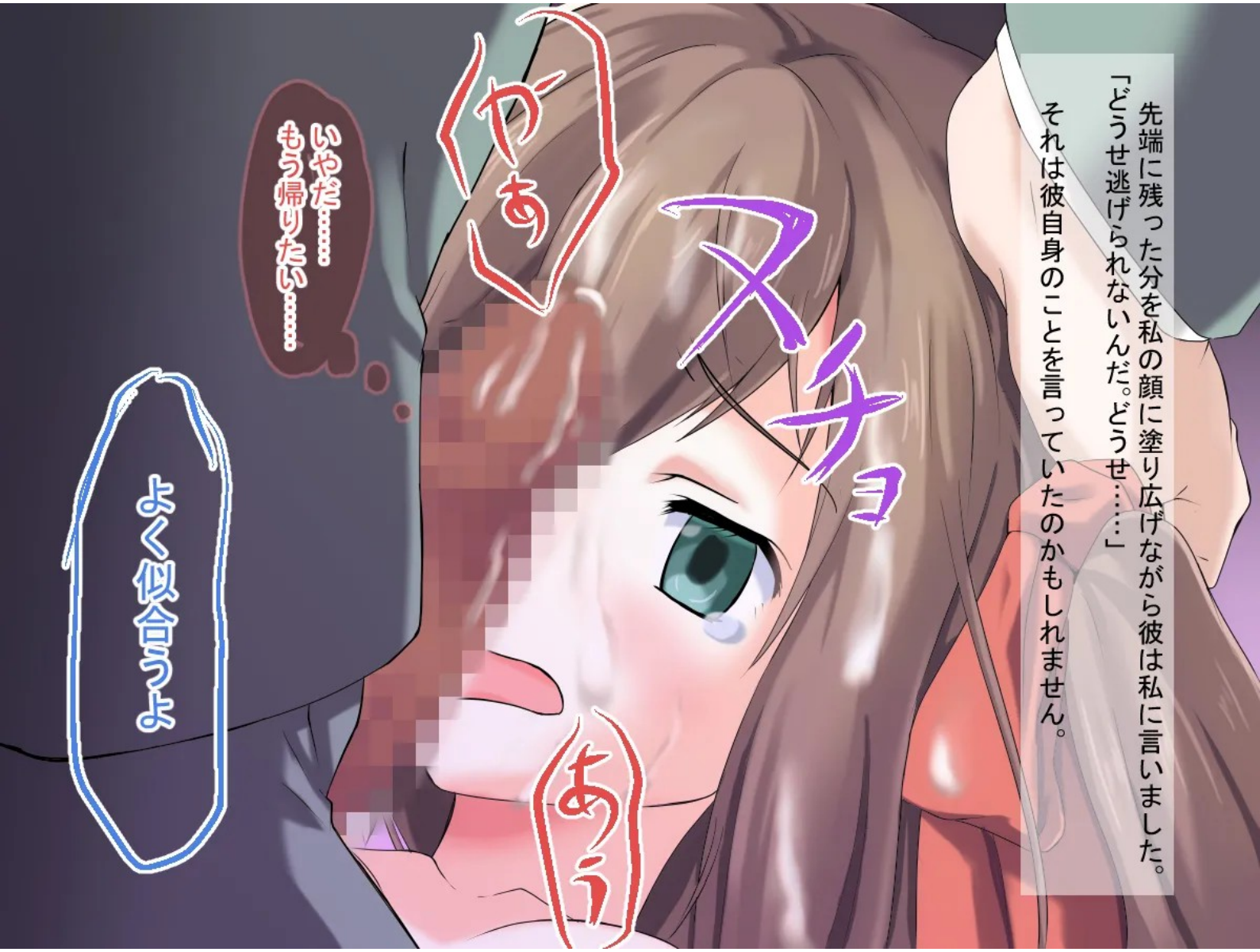
彼の言葉は、どれも私に関係のない話でした。

そこに私がいなければ、こんなことは起きなかったはずです。

屈折した彼からには、私の些細な親切すら
気に触るものだったかもしれません。
それでも、私のせいではないと思います。


ただ口を開け、彼が満足するのを待つことしかできません。
あとから色々できたんじゃないかって思うんですけど、
その時は何もできず、どんどん激しくなる動きにただ耐えてました。
ぐりぐりっ
んぐ
ひゃめえ
じゅぷ
ずちゅっ
それは彼が「出すぞ」と言った時もそうでした。

口の中でビクビクと男の人の部分がが疼き、
喉の奥に直接精液を流し込まれました。
私は咽ながらそれを受け入れることしかできません。
いくらか飲んでしまい、喉の奥からこみ上げる
生臭さで吐きそうでした。


先端に残った分を私の顔に塗り広げながら彼は私に言いました。
「どうせ逃げられないんだ。どうせ……」
それは彼自身のことを言っていたのかもしれません。
ゆあ
ヌチョ
あう
いやだ……
もう帰りたい……
よく似合うよ

うつ伏せにされてパンツを脱がされました。
一番恥ずかしい場所を見られてるんだと思うと、恥ずかしくて
たまりませんでしたが、すぐそこを触られて考える余裕もありませんでした。
指で広げられる感じがして、そこではじめて自分のそこが
濡れていることを知りました。
そこは直接触られてないし、
感じてだっていなかった……はず、ですから。
いやあ
あっ
グイ
見ちゃダメえっ
小ちゃい
○○
だな

突然私の中に何か入ってきました。
肉がひきつる感じと、強烈な違和感。
自分の中で別のものが動くのが
すごく気持ち悪く感じました。
くちゅ
ビクン
ひぃっ
おお、キツキツだな
やだ
んあああ
やだ

「もしかして、処女？」
そう訊かれると恥ずかしくて、
でも許してくれるんじゃないかと思って正直に頷きました。
もちろんそんなはず、ないんですけど。
馬鹿ですよね。
彼は笑いながら指を動かしていました。
うっ
クチュ
クチュ
ズプ
コク
コク
さすが巫女
楽しめそうだ

敏感な場所を触られて、声がもれました。
それが彼を増長させるとは分かっていても
どうしようもありませんでした。
なぜ誰もこないのだろうと、八つ当たりしたい気分でした。
でも誰も助けてくれません。

「まぁこんなもんか」
　彼が指を抜いた隙を見て、私はおぼつかない足で逃げました。
　フラフラとしながら、家がある方へと。
脱がされたパンツが脚から抜けて落ちても、拾う余裕もありません。
　いまだに脚の間に残るおぞましい感触が私の背中を押しました。

だけどやっぱり、逃げられるわけがなかったのです。

すぐに追いついた男に押し倒され、脚を広げられるます。
蹴ろうとしたけれど、脚の間に入り込んだ男の人には
無意味な抵抗でした。

熱いものが押し当てられ、私は必死に暴れたました。

徐々にそこにかかる力が大きくなってきました。
圧迫感に息を吐くこともできなくなって、ただ私は
泣くことしかできません。
ちょっとずつ入り込んでる感じがして、熱が伝わってきました。

彼は何か呟いていましたが、聞いてる余裕はありません。
そして……

ズッ
ブッ
んぎっ
だめ
いやああ
熱いものが勢い良く入り込み、少し遅れて強い痛み。
その意味を知り、私は……何もできませんでした。

キツキツの処女マ○コ最高だぜ
ズキ
ズキ
痛い！痛いよぉ
どうしてこんな…
たっぷりかわいがってやるよ
彼は、笑っていたと思います。
私は体の内側につけられた擦り傷に、
ただ耐えることしかできませんでした。

彼は私を気遣う様子もなく腰を振り始めました。
いくら泣いて頼んでも無駄でした。

犯されながら、あちこち触られたり舐められたりしました。
どうしてこんなことになったのか、何かいけないことをしたのか。
そんなことを考えてました。
声を掛けなければ、お茶を上げなければ、早く帰っていれば。
そんなことを考えて時が過ぎるのを待ちました。
気持ちいいだろ
やだ
いやよ
なんでこんな
ペロ
ムニュ

そうやって自分の中に閉じこもって、
自分を守っていたんだと思います。
彼の存在から必死で目をそらしました。
ああああっ
ああっ
ああっ
ズンズンブルブル
ズン

多少は痛みも和らいだころでしょうか。
無理矢理でも、身体は受け入れ始めていたんです。
私の中はさっきよりずっと濡れていて、ぴちゃぴちゃと水音がしました。
自分自身に裏切られた気がして、私が壊される気がしました。
あっ
うう
いかあっ
いい感じになってきたね
巫女がこんなのでいいのかな？
グチュ
ピチャ

そこで彼が一度動きを止めました。
動かなくなった代わりに脈打つ感じが伝わってきました。
そうして彼は言ったんです。

「どこに出してほしい？」

それから、前より激しく動き始めました。

外に出してというようなことを言ったと思います。
でもそんなの、最初から聞くつもりなんてなかったんです。

激しく腰を振って、最後に一際強く、奥を突かれ、
がくがくと震えました。

はっきりとは、分かりませんでした。
急に止まった彼の動きに、嫌な感じがしただけで。
あれが中に出される感覚なんだと、
意識したのはもっと落ち着いてからでした。

引き抜かれてもまだ、そこには異物感がありました。
ジクジクと痛むそこから、恥ずかしい音を立てて
白い液体が零れてきます。
お尻の方へ伝う熱さを感じ、
妊娠の二文字を思い浮かべました。

今すぐ洗えば大丈夫かもしれない、
すぐに洗わないといけない。
そんなことを漠然と思い、でも頭がズキズキして、
体はあちこち痛くて、私は動けませんでした。

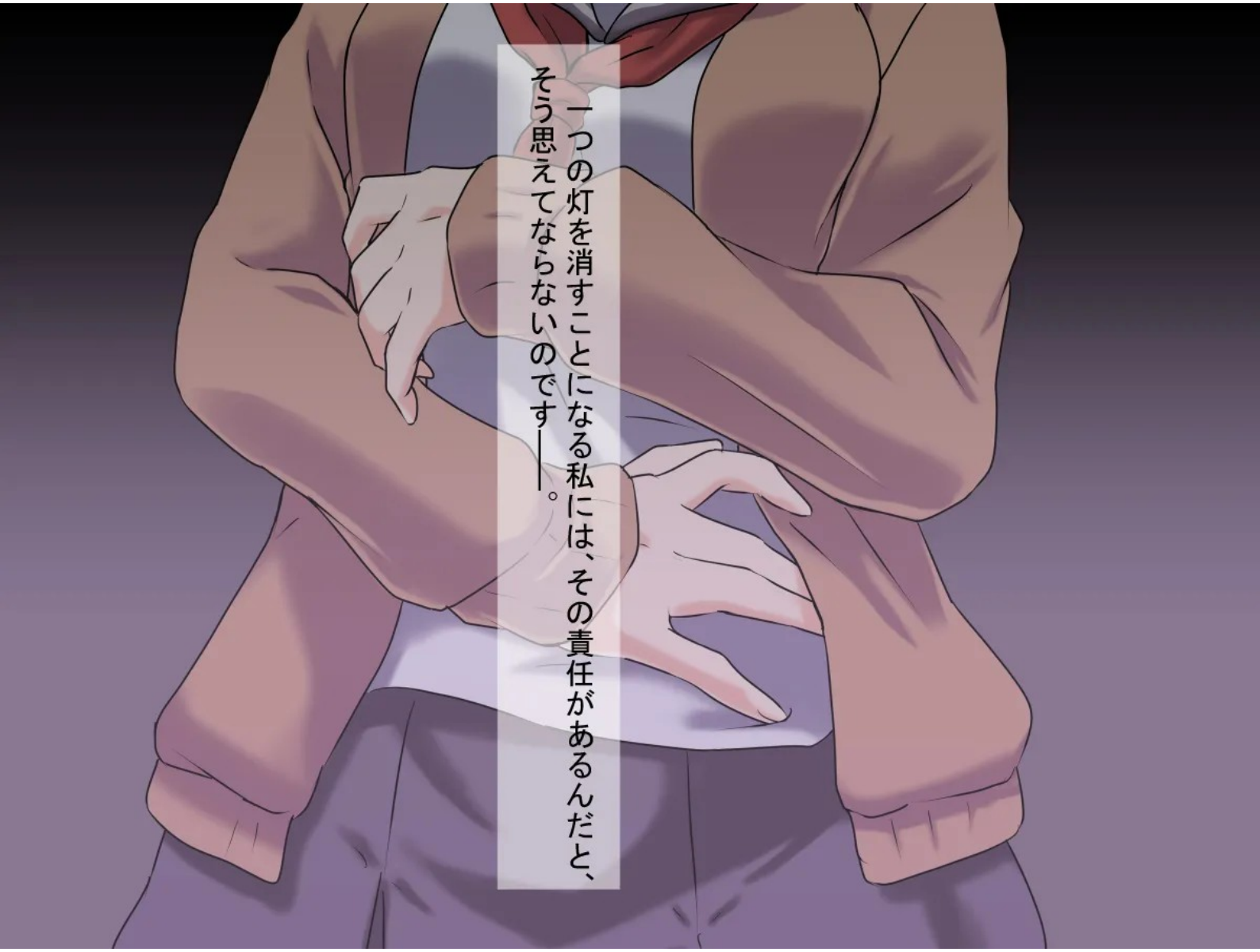
彼はまだ私を逃がすつもりはないようでした。
辺りはもう暗くなっていて、
私は両親が心配してるんじゃないかとなんて漠然と考えてました。
グチュ
ズブ
パン
パン
あっ
んあ
あ
あ
巫女のくせに随分
いい声出すじゃないか
再び彼が入ってきた時、最初と比べてスムーズだったことが印象に残ってます。
そこはもう互いの体液で濡れて、ポッカリと口を開けていたんでしょう。
……あの時の自分のことは、今でも認められません。

それから何をされたのか、もう分かりません。
私はただ、彼を受け入れることしか
できなかったんですから……。
ドクッ
ドクッ
ドクッ
ドクッ
あっ
あっ
はっ
はっ

気が付くと私は賽銭箱にもたれるようにしていました。
よく見ると何か掛けられていて、それはあの時渡した
ペットボトルのミルクティーでした。
その匂いと生臭さが混じりあい、異様な臭いを放ってました。
今でもミルクティーの匂いを嗅ぐと、あの時のことを思い出します。
その行動に何の意味があったのか、ふと考えてしまうんです。

そのあとも大変でした。体の汚れを最低限落とし、
人目を盗んで家に帰りました。
親の顔が見られなくて、でも何でもないふりをしました。
その後も私は調子を崩したり、酷いものでした。

その体験を経て、私は大切なものがあっさりと
奪われることもあることを知りました。
そして、場合によっては私が奪う立場になることも。
……きっと私はもう、今までの私には戻れないのだと思います。


一つの灯を消すことになる私には、その責任があるんだと、
そう思えてならないのです――。